

共生社会を担う子供を育成する

道徳教育の実践的研究

— 発達障害について知り、考える授業プログラムの活用を通して —

長期研修員 金井 智之

《研究の概要》

本研究は、発達障害を題材としたオリジナル教材とその教材を用いた道徳の授業を中心とした授業プログラムの作成と活用を通して、個性を尊重し合える児童を育成し、これからの共生社会を担うための素養を養うことを目指したものである。授業プログラムは、プログラムの目的や授業の留意点を授業者が確認する「プログラム手引書」、実践の前に児童の実態を把握する「児童アンケート」、発達障害について知り、よりよい人間関係の形成について考える「学級活動の授業」、見えない大変さがある児童が登場するオリジナル教材を用いた「道徳科の授業」の四つで構成されている。この授業プログラムの有効性について、小学校4年生及び6年年での実践を通して明らかにした。

キーワード 【道徳 学級活動 発達障害 オリジナル教材 共生社会】

群馬県総合教育センター

分類記号：G10-01 令和5年度 282集

I 主題設定の理由

令和5年度版障害者白書（内閣府）¹⁾の「第2章 6 教育・福祉における取組」では、「障害のある幼児児童生徒と、障害のない幼児児童生徒や地域の人々が活動を共にすることは、全ての幼児児童生徒の社会性や豊かな人間性を育む上で意義があるだけでなく、障害のない幼児児童生徒や地域の人々を含めた周囲の大人が障害のある子供や障害に対する正しい理解と認識を深める上でも重要な機会となっている。」と、共生社会を実現していくことの重要性を示している。群馬県では、「第2期群馬県教育大綱」（令和3年3月）²⁾の基本方針において、「誰もが互いに多様性を認め合い、共に支え合う教育を推進」と示し、学校教育を通して、互いのよさを認め、互いを支え合う共生の精神を養うことを掲げている。以上のことから、将来の共生社会の担い手となるための素地として、学校教育において多様な個性を尊重し合える児童を育成することは必要不可欠なことであると言える。

一方で、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（平成29年7月）³⁾では、「第4章 第3節 6 情報モラルと現代的な課題に関する指導」において、「児童には、発達の段階に応じて現代的な課題を身近な問題と結び付けて、自分との関わりで考えられるようにすることが求められる。」と示されており、現代的な課題を道徳科で扱い、それらの課題の解決に寄与しようとする心情や判断力、意欲や態度を育てよう努めることを求めている。また、現代的な教育課題を取り扱う上で、「各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における学習と関連付け、それらの教育課題を主題とした教材を活用する」などして、児童の考えを深める取組を行うことを求めている。このようなことから、道徳教育において日々変化する現代的な課題を扱った道徳科や学級活動の授業を中心とした取組を行い、多様な個性を尊重し合える児童を育成することは意義が大きいと考える。

扱う現代的な課題については、生徒指導提要（令和4年12月改訂）の「第Ⅱ部 個別の課題に対する生徒指導」において、個別の重要課題として、性的マイノリティ・発達障害・精神疾患・健康課題・支援を要する家庭状況への理解と対応を今回の改訂で新たに追加している。この五つの中でも特に発達障害については、子供たちが身近に接していて、その理解や対応を考えていかなければならない課題であると考えられる。「小学校の通常の学級における発達障害に関する理解を促すための教師の取組」において山田⁴⁾は、小学校の通常学級の担任を対象とした質問紙調査を行い、通常の学級の児童に発達障害に関する理解を促すための取組の実態把握と、その困難さの考察を行っている。調査によると、発達障害に関する理解を促す授業を「行わない」と回答した担任が半数以上おり、その理由としては、そういった授業の経験が少ないこと、学級に発達障害の児童が在籍していないこと、専門的な知識がないことなどを挙げている。考察では、発達障害に関する理解を促す授業を行う「きっかけ」を待っている、「後追い」的な指導しか行うことができないことから、「特定の対象児に関する障害の理解だけでなく、一般的な発達障害に関する理解を促す授業を行うこと」が課題となると述べている。

研究協力校（以下、協力校）では、「生きる力を育むために自立と共生を目指すこと」を学校経営のテーマに設定し、真に他を認め、支え合いながら生活できる児童の育成に努めている。児童の実態については、学習上又は生活上の見た目に表れにくい困難さ（以下、見えない大変さ）がある友達に対して、受容的な態度で接することができる児童が多い。一方で、自分と異なる特性がある相手に対して距離をとろうとする児童や、苦手な活動がある友達に対して過度に学習を支援しようとする児童も一定数いる。また、周囲からの過度な支援により、自己肯定感がなかなか高まらない児童も見られる。教師向けアンケートによると、発達障害の理解や、発達障害に関わる課題の解決を目的とした授業を行った経験がある教師は半数近くいたが、大半が課題の解決に向けて合意形成を図る学級活動が主であり、道徳科の授業で行ったという声は少なかった。

以上のことから、本研究では、将来の共生社会を担う子供の育成のためには、小学校の段階では個性を尊重し合える児童を育成することが必要不可欠であると考えた。そして、小学校の道徳教育において、見えない大変さがある児童が登場するオリジナル教材と、その教材を用いた道徳科の授業を中心としたどのような学級でも授業が行える授業プログラムを開発して活用することで、個性を尊重し合える児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

将来の共生社会の担い手となるための素地を養うため、小学校の道徳教育において、個性を尊重し合える児童の育成を目指し、見えない大変さがある児童が登場するオリジナル教材と、その教材を用いた道徳科の授業を中心とした授業プログラムを作成し、活用することの有効性を明らかにする。

III 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 文言の定義

① 「共生社会を担う子供」とは

本研究では、見えない大変さがある友達と、表面上仲良くしたり、特別視して優しくしてあげたりするのではなく、大変さを理解した上で、苦手なことは誰にでもあることに気づき、支える側と支えられる側で分けるのではなく、共に支え合っていこうと考えられることを、将来的に「共生社会を担う子供」の姿とした。

② 「発達障害について知り、考える授業プログラム」とは

本研究では、授業プログラムの目的や留意点を授業者が確認する「プログラム手引書」、実践前の児童の心情の実態を見取る「児童アンケート」、発達障害について知りよりよい人間関係の形成について考える「学級活動の授業」、見えない大変さがある児童が登場するオリジナル教材を用いた「道徳科の授業」の四つをパッケージにしたものを「発達障害について知り、考える授業プログラム」とした。

(2) 手立ての説明

① 学級活動と道徳科の授業のつながりの効果

本プログラムでは、はじめに学級活動の授業を行った後、次に道徳科の授業の順で授業を行う。よりよい人間関係の形成について考える学級活動の授業では、児童は、発達障害を始めとした見えない大変さがある人に対して、「特別扱いはしない」「誰にでも苦手はあるのだし、誰にでも優しくする」といった意思決定を行う。しかし、この時点での意思決定は、まだ表面的なものであるかもしれない。そこで、実際の生活に近い場面で本当に意思決定した行為を実践しようと思えるかをもう一度考えるために、直後に道徳科の授業を行う。道徳科の授業において、児童は、見えない大変さがある登場人物が登場するオリジナル資料を用いて、より具体的で、児童にとって身近な場面設定における道徳的行為について考え、議論する。道徳科の授業の中心発問では、学級活動の授業での体験や意思決定、そしてオリジナル教材の内容が基になり、どのような行動がよいのだろうという葛藤が生まれる。この葛藤や、児童同士の多様な考えの交流により、道徳的心情が深まっていくであろうと考えた。

② 発達障害類似体験

学級活動の授業において、実感を伴った見えない大変さへの気づきを促すために、発達障害の類似体験を行う。中学年用と高学年用で、活動内容は同様のものを行う。類似体験は、「聞こえづらさ」と「見えづらさ」の二つから事前に授業者が選択する。自分自身の「話す、書く、聞く、読む」ことについての自己評価を「得意・苦手グラフ」に記すことで、自分を含めた誰にでも得意なことや苦手なことがあり、発達障害があることで苦手なことがあっても特別なことではないと自他の個性について理解する。

③ オリジナル教材と中心発問

道徳科の授業は、見えない大変さがある児童が登場するオリジナル教材を用いて行う。後述するオリジナル教材には、主人公が児童の実態に近い考え（物語内の主人公の行動）と、理想的な考え（道徳的価値）の二つの考えの間で葛藤する場面があり、その場面で中心発問を行う。児童は主人公が葛藤する二つの考えのどちらに共感したか、それぞれの立場の考えを理由を交えて議論を行う。この中心発問で、児童自身にも、学級活動の授業での体験や意思決定、そしてオリジナル教材の内容が基になって、どのような行動がよいかという葛藤が生まれるであろうと考えた。

2 授業プログラムの概要

(1) 教師用プログラム手引書

実践の前に、授業者が、本プログラムの目的、発達障害類似体験や教材の内容の意図、授業中の手立てへの理解を深め、授業プログラムをより効果的に実施するための説明が記述されている（図1）。

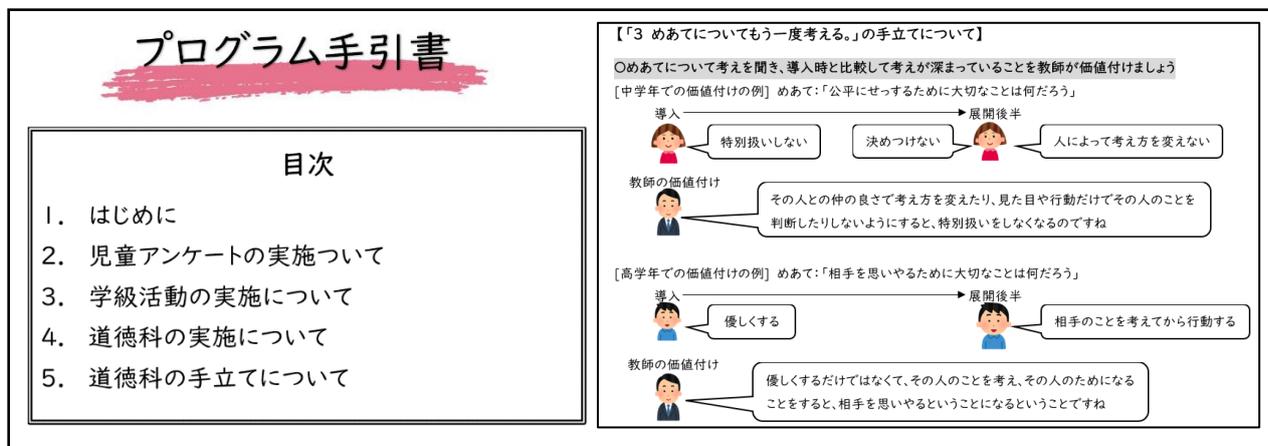


図1 教師用プログラム手引書の一部

(2) 児童アンケート

児童の実態を把握するために、実践の前に授業を受ける全児童を対象にして行うアンケートである。中学年用は、「授業で交流活動をする時、どのような相手と交流しようと思うか」を問い掛け、高学年用は、「周囲に苦手な活動で困っている友達があったとき、どのような行動をとるか」を問い掛ける内容である。アンケートの結果を集計し、授業プログラムの道徳科の授業における導入で、問題意識をもたせるために使用する。また、本研究においては、実践後にも同様のアンケートを行い、児童の心情の変容の見取りにも活用した。

(3) 発達障害類似体験

学級活動の授業で行う、自作の教材を使った体験活動である。「聞こえづらさ」の体験は、発達障害がある人の特性の一つである「聴覚過敏」を類似体験する。朝の会における先生の話の場面を想定した「通常の音声」と「聞こえづらい音声」を聞き比べる。「聞こえづらい音声」は、先生の話す声と周囲の雑音が同じ音量で録音してあり、聞こえてくる情報や刺激の取捨選択がうまくできない聞こえ方を体験することができる。

「見えづらさ」の体験は、発達障害がある人の特性の一つである「視覚過敏」を類似体験する。「通常の文章」と「見えづらい文章」を見比べる。「見えづらい文章」は、文字が小刻みに動いて見える文章と、文字が水に浸したように、にじんで見える文章を体験することができる。

(4) オリジナル教材

道徳科の授業で用いる自作の教材である（次ページ図2）。内容項目については、個性を尊重し合える心情の育成に向けて関連するものを精選し、発達の段階を踏まえ、中学年では「公正、公平、社会正義」、高学年では「親切、思いやり」を扱うこととした。資料は、発達障害がある人物が登場し、主人公が異なる二つの考えの間で葛藤する場面で終わる。結末が明示されていないので、主人公の気持ちになり、その心情を議論することができる。オリジナル教材を用いる理由は、以下のとおりである。

- ・ 授業プログラムの学級活動で考えたことを、児童にとって、より具体的で身近な場面に置き換えて、改めて考えられるようにする教材が必要であること。
- ・ 授業後に、児童が発達障害に対して教師の意図とは違った理解をしてしまったり、特定の児童をからかったりすることのないよう、発達障害に関する内容を丁寧に表現した上で、見えない大変さがある人物が、前向きに活動している様子を描いた教材が必要であること。

[概要]
学級会で司会をするようになった主人公が、公平に指名するかスムーズな進行を優先するかで葛藤する物語。
どのような相手でも分け隔てなく接しようとする心情について考える。

[概要]
主人公が、読むことが苦手な友達の活動を手伝った自分と、その友達自身に活動をさせたアツシ君の行動を比べて葛藤する物語。
相手のことを大切に思いやりの心をもとうとする心情について考える。

トモ君がおどろいたように言った。周りの子は笑っているが、わたしはちよんぷんとした。「これは、いっしょけんめい司会しているのに」と、心の中で思った。
次に、同じ思い事に通って、いつもいっしょにアツシ君をさして、アツシ君は、事数がとんで、せつめいをするのが上手な子だ。
学級会は、じぶんちよんぷんに進んだ。
「たくさん意見が出てきたので、どのレクリエーションをするのクラスがよりよくなるか意見を出してください。」
学級会の残り時間はわずか「これは、うまく話をまとめてくれる人に選んでもらいたかった。」
トモ君が、ふたたび元気よく手をあげている。しかし、まじめに意見を言ってくれるか不安に思い、さすことができなかった。わたしは、またアツシさんとアツシ君をさした。
意見はうまくまとまらなかった。司会の仕事をきちんと行うことができて、「安心していた。」



「ありがとう。」
と、トモ君にお礼を言われたので、わたしはうれいしい気持ちになった。
次の総合の時間も、トモ君がタブレットにうつっている文字を時間をかけて読んでいたので、わたしは代わりに読んで、ノートにうつしてあげた。トモ君は、「ありがとう。」
と、お礼を言ってくれた。



図2 各プログラムのオリジナル教材の一部

3 研究構想図



IV 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

【中学年用プログラム（4年生で実施）】



【高学年用プログラム（6年生で実施）】



対 象	研究協力校 小学校第4学年 86名（3クラス）
実 践 期 間	令和5年10月26日～11月10日 2時間（学級活動1時間・道徳科1時間）×3クラス
題 材 名 （学級活動）	「見えない大変さについて知ろう」 （2）イ よりよい人間関係の形成
題材の目標 （学級活動）	発達障害について知り、よりよい人間関係の形成に向けた考えをもつ。
主 題 名 （道徳科）	「公平な心」 教材名「学級会」 （内容項目C 公正、公平、社会正義）
ね ら い （道徳科）	どのような相手でも分け隔てなく公平に接しようとする心情を養う。
対 象	研究協力校 小学校第6学年 78名（3クラス）
実 践 期 間	令和5年11月9日～11月22日 2時間（学級活動1時間・道徳科1時間）×3クラス
題 材 名 （学級活動）	「見えない大変さについて知ろう」 （2）イ よりよい人間関係の形成
題材の目標 （学級活動）	発達障害について知り、自分を含めた個性の一つであることに気付き、よりよい人間関係の形成に向けた考えをもつ。
主 題 名 （道徳科）	「相手を思いやる心」 教材名「思いやりの行動」 （内容項目B 親切、思いやり）
ね ら い （道徳科）	相手のことを大切にする思いやりの心をもとうとする心情を養う。

2 検証計画

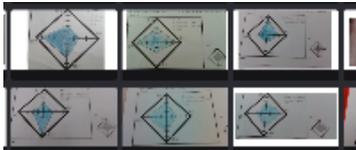
研究のねらいを達成するため、以下の手立てで検証を行う。

検証の視点	検証の方法
授業プログラムは、小学校段階における共生社会を担う子供を育成する道徳教育の充実を図ることに有効であったか。	・指導案提供者へのアンケートと聞き取り
授業プログラムを活用した授業を行うことによって、個性を尊重し合える児童が育成できたか。	・実践の前後での児童アンケートと実践で用いたワークシートへの記述の分析

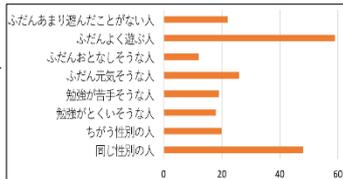
3 実践

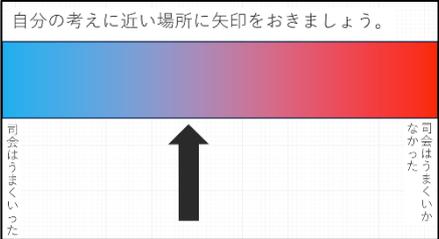
(1) 授業実践[1] 第4学年

① 学級活動

題材名：「見えない大変さについて知ろう」 発達障害類似体験：「見えづらさ」を選択	
<p>主な学習活動 ○主な発問</p> <p>1 事前に記入した得意・苦手グラフを参考に、本時のめあてをつかむ。</p> <p>○見えない大変さがある人と関わるとき、気を付けることはありますか。</p>	<p>・主な児童の発言、記述</p> <p>・人によって、グラフの形はいろいろあるのだな。</p>  <p>・その人の大変さを知らないと、傷つけてしまうことがある。</p>
<p>めあて 見えない大変さについて知り、よりよい人間関係について考えよう。</p>	
<p>2 「見えづらさ」の類似体験をする。</p> <p>○体験活動をしてみて、感じたことはありますか。</p> <p>○みんなと同じように、授業を受けているとしたら、どうでしょう。</p>	<p>・大変さがある人の見え方は、とても見えづらかった。</p> <p>・勉強などをするのが大変そう。</p> 
<p>3 「見えづらさ」がある人と自分たちの得意・苦手グラフを見比べて、気付いたことについて話し合う。</p> <p>○グラフを見比べて、気付いたことはありますか。</p> <p>○大変さがある人だけ、特別扱いをするのはどうでしょう。</p>	<p>・「見えづらさ」がある人は、「読む」が苦手で、グラフがでこぼこになっている。</p> <p>・同じように「読む」が苦手な人もいるし、自分みたいにそれ以外がとても苦手という人もいる。</p> <p>・もし自分だったら、自分だけ違う活動になるのは嫌だ。</p>
<p>4 本時を振り返り、意思決定を行う。</p> <p>○これから、いろいろな人とよりよい人間関係をつくっていくために、どのようにしていきたいですか。</p>	<p>・相手の様子を見て、必要だと感じたときは助けたい。</p> <p>・誰でも苦手なことがあるのだから、大変さがある人だけ特別扱いにならないようにしたい。</p>

② 道徳科

主題名：「公平な心」 教材名：「学級会」 (内容項目C 公正、公平、社会正義)	
<p>主な学習活動 ○主な発問 (◎中心発問 ◇補助発問)</p> <p>1 事前アンケートをもとに、本時で扱う道徳的価値について、問題意識をもつ。</p> <p>○相手の好き嫌いで、交流をする・しないを決めるのはどうでしょう。</p>	<p>・主な児童の発言、記述</p> <p>・自分と同じ性別や、普段よく遊ぶ人と交流しようと思う人が多いのだな。</p> <p>・よくない。</p> <p>・不公平だ。</p> 
<p>めあて 公平にせつするために大切なことは何だろう。</p>	
<p>○今の時点で、どのような考えをもっていますか。</p>	<p>・違う性別の人とも交流する。</p>

<p>2 教材文の範読を聞き、道徳的価値についての考えをもち、交流する。</p> <p>◎「学級会の司会の仕方について振り返った」時の「わたし」は、どのようなことを考えていたでしょう。</p> <p>(心情メーターを用いて、自分の立場を明示し、話し合いに活用する)</p> <div data-bbox="177 450 616 689" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>自分の考えに近い場所に矢印をおきましょう。</p>  </div> <p>◇トモ君と前から仲がよかったり、普段から真面目な姿を見せていたりしたら、「わたし」の対応はどうなっていたでしょう。</p>	<p>(司会進行重視[心情メーター：青]の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いはスムーズに進んだ。 ・トモ君は一度ふざけたような感じになったから、ちゃんとした意見を出してくれないと思った。 <p>(公平に指名重視[心情メーター：赤]の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一度、ちゃんと発言できなかつただけで、その後一度も指さなかつたのはよくなかつた。 ・トモ君は真面目に発言できないと決めつけていた。 <div data-bbox="1094 562 1439 786" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div> <ul style="list-style-type: none"> ・もっとトモ君をたくさん指名していたと思う。 ・一度発言できなかつたくらいでは、ムツとしていなかったと思う。
<p>3 めあてについてもう一度考える。</p> <p>○誰とでも公平に接するには、どういうことが大切なのでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手によって（性格や好き嫌いで）対応を変えない。 ・すぐ決めつけるのではなく、相手のことをよく知る。
<p>4 前時の学級活動と、本時で扱った道徳的価値に対する思いや願い、考えを振り返る。</p> <p>○学級活動と今日の道徳で考えたことを参考に、今までの自分、今の自分、これからの自分という視点で振り返ってみましょう。</p>	<p>主な児童の活動全体の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この人はできないと決めつけしないで、公平に接するようにしたい。 ・これまでは普段から遊ぶ人と学習でも関わることが多かったけど、これからはいろいろな人と関わってみたい。 ・ふざけている人に苦手意識があつたけど、よい考えをもっているかもしれないから、交流するようにしたい。

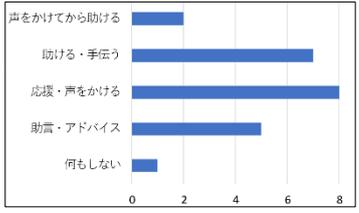
(2) 授業実践[2] 第6学年

① 学級活動

<p>題材名：「見えない大変さについて知ろう」 発達障害類似体験：「聞こえづらさ」を選択</p>	
<p>主な学習活動 ○主な発言</p> <p>1 事前に記入した得意・苦手グラフを参考に、本時のめあてをつかむ。</p> <p>○見えない大変さがある人と関わるとき、気を付けることはありますか。</p> <div data-bbox="177 1765 1358 1823" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>めあて 見えない大変さについて知り、よりよい人間関係について考えよう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・主な児童の発言、記述 ・自分に似ているグラフの人もいれば、似ていないグラフの人もいる。 ・相手の大変さに気付いていないと、傷つけてしまうかもしれない。 <div data-bbox="1082 1518 1439 1720" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div>
<p>2 「聞こえづらさ」の類似体験をする。</p> <p>○体験活動をしてみて、感じたことはありますか。</p> <p>○みんなと同じように、授業を受けているとしたら、どうでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「聞こえづらい音声」は、ガヤガヤが大きく聞こえて、先生の話が小さく聞こえた。 ・内容が全く入ってこなくて、大変。 ・勉強ができないって思われそう。

<p>3 「聞こえづらさ」がある人と自分たちの得意・苦手グラフを見比べて、気付いたことについて話し合う。</p> <p>○グラフを見比べて、気付いたことはありますか。</p> <p>○大変さがある人だけ、特別扱いをするのはどうでしょうか。</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・人それぞれグラフの形が違う。 ・自分は得意だけど大変さがある人は苦手、逆に自分は苦手だけど大変さがある人は得意なことがあった。 ・こちらが勝手に特別扱いするのではなく、その人の意思を尊重した方がいい。
<p>4 本時を振り返り、意思決定を行う。</p> <p>○これから、いろいろな人とよりよい人間関係をつくっていくために、どのようにしていきたいですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・得意、苦手は人それぞれだから、大変さがある人だけということではなく、助けが必要な人がいたら助けたい。

② 道徳科

<p>主題名：「相手を思いやる心」 教材名：「思いやりの行動」（内容項目B 親切、思いやり）</p>	
<p>主な学習活動 ○主な発問 (◎中心発問 ◇補助発問)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主な児童の発言、記述
<p>1 事前アンケートをもとに、本時で扱う道徳的価値について、問題意識をもつ。</p> <p>○本当に相手を思いやった行動と言えるのかな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・困っている人がいたら、助けたいと思う人が多いけど、助けない方がよいと考える人もいるのだな。 ・人によって、思いやりの行動が違うけど、どういう考えが大切なのだろう。 
<p>めあて 相手を思いやるために大切なことは何だろう。</p>	
<p>○今の時点で、どのような考えをもっていますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・優しい気持ち。 ・みんな同じように、優しく接する。
<p>2 教材文の範読を聞き、道徳的価値についての考えをもち、交流する。</p> <p>◎「今までの行動を思い返した」時の「わたし」は、どのようなことを考えていたでしょう。</p> <p>(心情メーターを用いて、自分の立場を明示し、話し合いに活用する)</p> <p>◇みんながトモ君だったら、「わたし」とアツシ君の行動はそれぞれどのように思いますか。</p>	<p>(「わたし」に共感する[心情メーター：青]意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も、困っている人がいたら助けてしまう。 ・困っている人がいたら、助けるのが当たり前だと思う。 <p>(アツシ君に共感する[心情メーター：赤]意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分でやりたいという気持ちをもっているかもしれない。 ・自分で発表ができてトモ君は満足そうだったから、自分でやりたかったのかも。 ・どちらもうれしいけど、「わたし」の行動は、相手の気持ちを考えることが足りなかったと思う。 
<p>3 めあてについてもう一度考える。</p> <p>○相手を思いやるには、どういうことが大切なのでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちを考える。 ・相手の気持ちを尊重する。

<p>4 前時の学級活動と、本時で扱った道徳的価値に対する思いや願い、考えを振り返る。</p> <p>○学級活動と今日の道徳で考えたことを参考に、今までの自分、今の自分、これからの自分という視点で振り返ってみましょう。</p>	<p>主な児童の活動全体の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と相手の足りないところを、補い合えるようにしたい。 ・今までは、相手の気持ちを考えずに手伝っていたかもしれない。これからは、自分の行動が本当に相手にとってよい行動なのかを考えてから行動したい。 ・相手を思いやるには、する優しさとしらない優しさ、どちらが相手にとってよいかを考えた上で行動したいと思った。
---	---

V 研究の成果と考察

1 授業プログラムは、小学校段階における共生社会を担う子供を育成する道徳教育の充実を図ることに有効であったか。

(1) 結果

授業実践を行った協力校の実践を参観した教師2名と授業プログラムを提供した教師4名に、研究の目的に対する授業プログラムの有効性についてアンケート調査を行った。学級活動の「発達障害類似体験」と道徳科の「オリジナル教材」について、「有効であった」「おおむね有効であった」「あまり有効でなかった」「有効でなかった」のうちから選択してもらい、その理由を聞いた。

<p>【発達障害類似体験について】「有効であった」2名 「おおむね有効であった」4名</p> <p>○ 児童が見えづらさを理解するにはとても有効であった。「こんな見え方はかわいそう」という方向に行き過ぎるのが少し気がかりだが、「特別ではなくみんな同じ」という考えに行きつくまでに必要な過程なようにも感じる。(4年担任)</p> <p>○ 「見えない大変さ」(見た目に表れない困難さ)と「見え方に大変さがある」(視覚に障害があること)という二つの言葉が混同してしまい、児童への伝え方が難しかった。(4年担任)</p> <p>○ 見えない大変さを体験できた。今までの学校生活では知ることができなかった大変さがある人に対する児童の考えを知ることができた。大人が思っている以上に、児童は共生について深く考えることができそうだと感じた。(4年担任)</p> <p>○ 普段、周囲から支援されることが多く、自分に対して自信がもてていない児童が、「誰にでも苦手なことがあるから平等にしなくてはいけない。」という記述をしていた。「お互い様」という考えが芽生えるとよいと思った。(6年担任)</p> <p>【オリジナル教材について】「有効であった」4名 「おおむね有効であった」2名</p> <p>○ 物語内の「学級会が成功かどうか」が、「うまく話をまとめること」ではなく、「みんなが納得」ということに焦点が向きやすい教材なので、どんな人でも平等に接しようという思いをもちやすいと感じた。学級会が成功したかどうか、登場人物によって考えが異なるので、物語の終末で葛藤する主人公の心情が理解しやすく、多面的に考えることもできる。(4年担任)</p> <p>○ 扱いにくい題材について触れている教材があるのはありがたい。(4年担任)</p> <p>○ ワークシートの記述から、自分なりの思いやりを考える児童がたくさんいたことが分かる。終末の振り返りで「今まではただ助ければよいと思っていただけ～」と書いているところから、本教材を用いた学習を通して、よく自分のことが振り返れていたように感じる。(6年担任)</p> <p>【その他】</p> <p>○ 学級活動と道徳科のつながりを意識させるために、それぞれのワークシートがまとまっているワークシートを用いてもよいのではないか。(4年担任)</p>
--

- プログラム手引書の3・4ページに「理想的な活動後の児童の心情」が簡潔に記してあって、分かりやすかった。（4年担任）
- 学級活動と連携された道徳科を実践する機会がこれまでなかったので、大変貴重な経験をさせてもらった。「見えない大変さ」ということで少し配慮が必要な教材であるとは感じたが、多種多様な人間関係の中で生きていくことは今後避けられない時代なので、子供たちにとってもよい題材だったと思う。（6年担任）

(2) 考察

教師に行ったアンケートの記述から、道徳科のオリジナル教材については「今まで（自分が）取り上げてこなかった題材で、児童が見えない大変さがある人に対してどう考えるかが分かり、大変参考になった」「丁寧に登場人物の様子が描かれているので、児童の思考が指導案のとおりに移り、授業が行いやすかった」という意見があった。発達障害について、誤解を生まないように丁寧に表現して教材化し、留意点を詳細に解説した手引書と指導案を一緒に活用することで、「専門的な知識が必要」「教えた経験がないから不安」といった発達障害に関わる授業の既存の課題を解決するための授業プログラムとなったと考える。

また、授業プログラム全体のことについて、「こちらが想定していた以上に、児童が共生に向けた考えをもてることに驚いた」「こちらが勉強になった」「自分もこの教材を用いて授業をやってみたくなった」（参観した教師）といった意見があった。この授業プログラムが、教師側の発達障害への理解を深めたり、共生社会を担う子供を育成する必要性を感じたりするきっかけにもなり得ると感じた。

6年担任への聞き取りから、「学級活動と連携された道徳科を実践する貴重な経験をさせてもらった」という感想があった。本プログラムの、学級活動で課題についての知識や体験を基にして意思決定をして、道徳科でもう一度その課題について考え、自分なりの思いをもつという組み合わせであれば、答えが一つではない現代的な課題について児童と一緒に考えを深めていくことができると考えた。

以上のことから、授業プログラムは概ね小学校段階における共生社会を担う子供を育成する道徳教育の充実に有効であったと考えられる。

2 授業プログラムを活用した授業を行うことによって、個性を尊重し合える児童が育成できたか。

(1) 結果

① アンケート結果

授業実践を行った学級の児童を対象に、プログラム実施の前後で授業プログラムの「児童アンケート」を実施した。第4学年の「児童アンケート」の質問内容と結果の変容は、図3のとおりである。

質問：授業の中で、意見を交流する場面があります。どのような人と交流しようと思いますか。

(複数選択：解答人数80人)

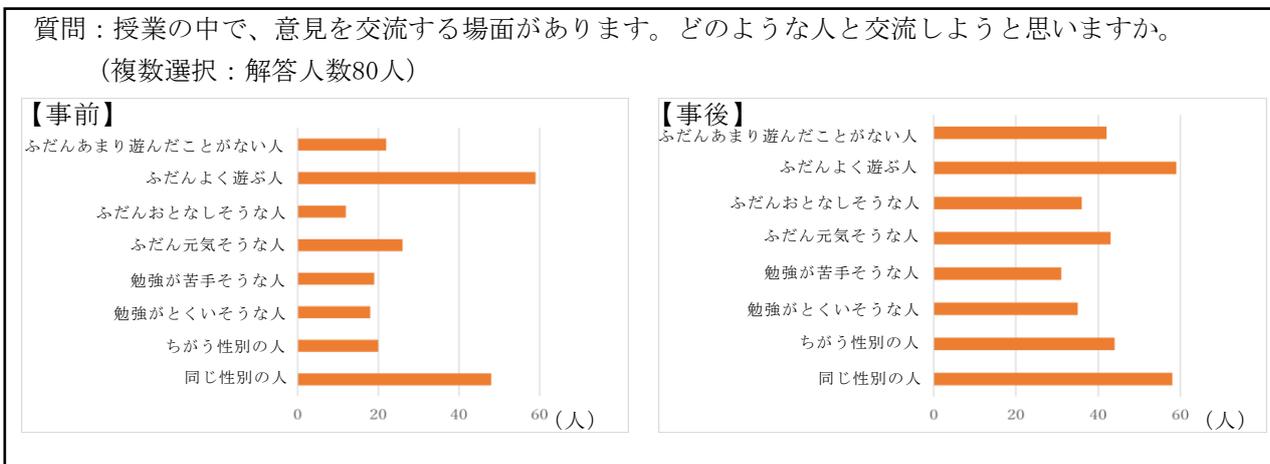


図3 第4学年「児童アンケート」グラフの変容

表1 第4学年「児童アンケート」記述の変容

質問：なぜ上記（前ページ図3）のような人と交流しようと思ったのですか。（記述）		
	【事前】	【事後】
児童A	[同じ性別・ふだんよく遊ぶ人を選択] 話しやすい	[ちがう性別・遊んだことがない人を追加] いろいろな意見を聞ける
児童B	[勉強が得意そうな人を選択] 納得できる意見が出そう	[全員を選択] 男女関係なく交流する
児童C	[ふだん元気そうな人を選択] 意見を聞いてくれそう	[全員を選択] いろいろな人と交流してみたい

前ページ図3を見ると、授業プログラムを実施したことで意見交流の場面で多様な相手と交流しようと考えた児童が多かったことが分かる。全部の選択肢を選択した児童は、事前の5名から事後は17名に増えた。記述の変容を見ると、事前では表1の児童Aのように同じ性別や普段から仲のよい相手を選択し、その理由として「話しやすい」と解答する児童が割合としては一番多かった。また、1割程の児童は、「よい意見をもっていそう」や「（自分の）意見を聞いてくれそう」など、普段の様子から交流する時の相手の行動を判断して、交流する相手を決定していることが分かった。一方、事後では交流する相手の選択肢を増やし、その理由を多様な意見を聞けることや、交友関係を広げられることと記述する児童が多かった。また、「特別扱いはしないと授業で学んだから」など、授業プログラムの内容に触れている記述も見られた。

次に、第6学年の「児童アンケート」の質問内容と結果の変容は、図4のとおりである。

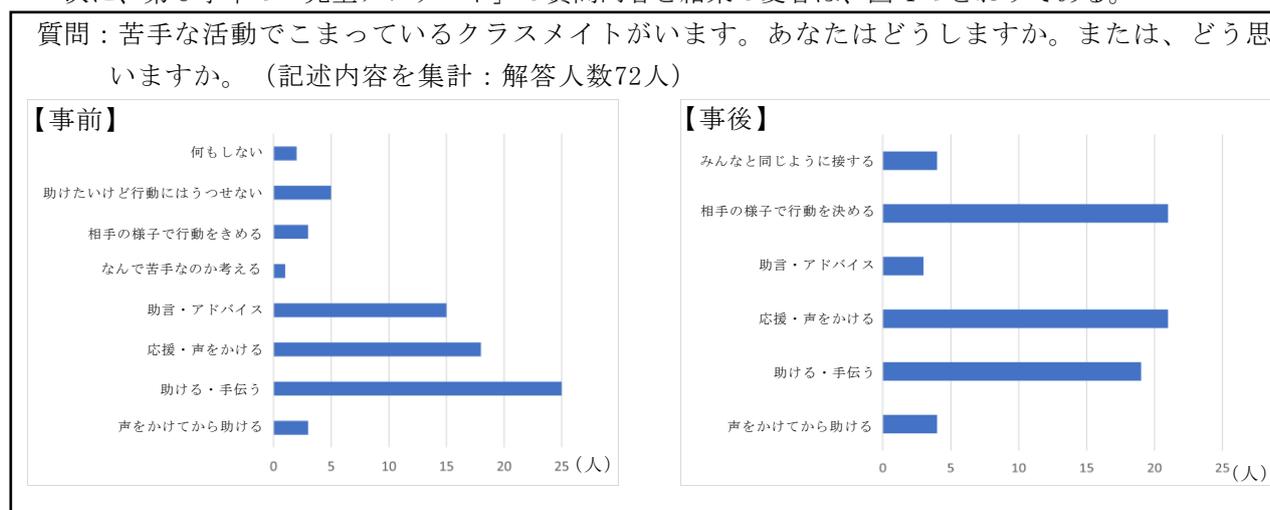


図4 第6学年「児童アンケート」グラフの変容

表2 第6学年「児童アンケート」記述の変容

質問：なぜ上記（図4）のように考えたのですか。（記述）		
	【事前】	【事後】
児童D	[「励ます」と行動を記述] 人には得意・苦手がある。	[「みんなと同じように接する」と行動を記述] 特別扱いされるのは嫌な人もいる。
児童E	[「優しく助言」と行動を記述] 分かることだったら教えたい。	[「やりすぎないように助ける」と行動を記述] どう活動すればいいか、一緒に考えたい。
児童F	[「助ける」と行動を記述] できるようになってほしい。	[「助ける」と行動を記述] 特別扱いにならないように、誰でも助けるようにする。

前ページ図4を見ると、授業プログラムを実施したことで、助言や手助けといった行動を起こす前に、その行動は相手にとって必要なかを考えてから行動を起こそうとするなど、相手を意識した記述の見られる児童が増加した。また、「特別扱いせずに、みんなと同じ接し方をしたい」という考えをもつ児童が数名出てきた。事後アンケートでは、事前に比べて「助言・アドバイス」という解答が減った。前ページ表2の児童Eのように記述が変容した児童もおり、「相手を尊重する」という意識が向上したことが考えられる。そして、「助ける・手伝う」と解答した児童の中にも、児童Fのように理由の中に「誰にでも同じように」と記述した児童が出てきた。

② ワークシートの記述

授業実践を行った学級の児童のワークシート（学級活動・道徳科）の振り返りの記述は表3、表4のとおりである。

表3 第4学年ワークシートへの記述

	【学級活動の振り返りの記述】	【道徳科（プログラム全体）の振り返りの記述】
児童G	大変さがある人がいたら、苦手なことをやるとき手助けしてあげたい。	主人公のように「あの人は〇〇だし」などと決めつけをしないようにしたい。
児童H	大変さに気付いたら、助けてあげたい。	今までは、ふざけている人に対して苦手意識があったけど、誰でもよい考えをもっているかもしれないから、ちゃんと交流していきたい。
児童I	相手をゆう先して、その人が手伝ってほしい時に手伝いをするとよいと思った。	今までは話しやすい人と交流することが多かったけど、これからはそういうのを気にしないで交流していきたい。

表4 第6学年ワークシートへの記述

	【学級活動の振り返りの記述】	【道徳科（プログラム全体）の振り返りの記述】
児童J	相手がどう思うか、よく考えてから、どう行動するか判断しようと思う。	自分や相手の苦手なことを補い合えるようにする。苦手を分かり合う。
児童K	大変さがある人に出会ったら、相手のことを理解し、特別扱いにならないように他の人と同じように接したい。	ただ相手を手助けするのではなく、相手と話して、本当に自分の手助けが必要かを考えてから行動しようと思った。
児童L	大変さがある人に対して、傷つけないように言葉に気を付けたい。	見えない大変さがある人は身近にいるかもしれないから、言葉に気を付けて、相手のためになっているか考えて生活していきたい。

(2) 考察

「児童アンケート」の結果やワークシートの記述を見ると、4年生では「どのような相手であっても分け隔てをしない」といった心情を養うことができたことが分かった。特に、事後アンケートの選択理由やワークシートの振り返りの記述に、「先入観はもたない」という旨の記述が多く見られ、公平についての心情の深まりを見取ることができた。6年生では「相手のことを大切にする」といった心情を養うことができたことが分かった。特に、事後アンケートやワークシートの振り返りの記述に、「相手の気持ちを考えて」や「お互い支え合って」といった記述が見られ、思いやりについての心情の深まりを見取ることができた。

道徳科における中心発問では、心情メーターでどちらの立場を選択しようか悩んでいる姿が見られた。これは、学級活動での体験や意思決定、オリジナル教材の内容が影響して、児童がどのような行動がよいのだろうと葛藤している姿であると考えた。また、その後の補助発問により、児童の思考の視点を変えることができ、オリジナル教材の主人公（児童自身）の至らなかつた点に気づき、道徳的心情を深め

ることができたと感じた。一方で、時間の関係で研究上の重要な手立て（指導案上は指導の留意点の欄に◎で表示）を行わなかったり、重要な手立ての発問の言葉が強調できなかつたりすると、児童の心情の深まりに差が生まれた。また、授業プログラム全体を振り返る場面では、記述が道徳科の授業についての記述のみになった児童が増加した。授業者が、目指す児童の理想像と授業プログラムの重要な手立てについての理解を深めた上で実践を行うと、より授業の効果が上げられると感じた。

VI 研究のまとめ

1 成果

- 中学年の道徳科において、児童にどのような相手であっても接し方を変えないで、公平に接しようとする心情を養うことができた。また、学級活動と道徳科を通して振り返ることで、相手に対して先入観はもたずに、相手のことを知ろうとすることが大切であるという考えをもつことができた。
- 高学年の道徳科において、児童に相手のことを大切にし、相手を思いやろうとする心情を養うことができた。また、学級活動と道徳科を通して振り返ることで、自分を含め誰にでも得意・苦手があるのだから、お互い支え合って協力していくことが大切であるという考えをもつことができた。
- 教師の、共生社会を担う子供を育成する道徳教育に取り組もうとする必要感を高めることができた。

2 課題

- 授業プログラムの中で、児童の心情が複雑に変容するので、「発達障害について知り、考える授業プログラム」を効果的に活用していくためには、授業者が共生についての理解を深め、目指すべき児童の理想像を明確にした上で実践を行っていく必要がある。
- 各学年の発達の段階に応じた指導を継続的に行っていくことで、児童の道徳的価値がより深まることが期待できる。

VII 提言

「発達障害について知り、考える授業プログラム」を基にして、現代的な課題を取り上げた授業実践を行うことで、共生社会を担う子供を育成する道徳教育の充実を図ることができる。

<引用文献>

- 1) 内閣府（2023） 『令和5年度版障害者白書』
- 2) 群馬県（2021） 『第2期群馬県教育大綱』
- 3) 文部科学省（2017） 『小学校学習指導要領 特別の教科 道徳編（平成29年告示）解説』
- 4) 山田真美（2009） 「小学校の通常の学級における発達障害に関する理解を促すための教師の取組」 『上越教育大学大学院 発達支援研究』 14号 pp7-9

<参考文献>

- ・文部科学省（2017） 『小学校学習指導要領 特別の教科 道徳編（平成29年告示）解説』
- ・文部科学省（2017） 『小学校学習指導要領 特別活動編（平成29年告示）解説』
- ・群馬県教育委員会（2019） 『はばたく群馬の指導プランⅡ』
- ・文部科学省（2022） 『生徒指導提要』
- ・水野智美（2016） 『はじめよう！障害理解教育』 図書文化
- ・高橋あつ子（2023） 「感覚の視点からのアセスメントと支援」 『学校教育相談』 37巻 2号 pp64-69

<担当指導主事>

飯島 花織 福島 純子